



## 覚醒

---

事件は一通り終焉を向かえ、再び平和な時間が流れ出したストレンジャー達の住む世界。今までに起こっていた騒動が嘘のように、今は静かな時間が流れていた。

.....いや、静かだと思い込んでいたのかもしれない。  
誰も気がついていなかっただけなのかもしれない.....

一人の存在に、異変が起きていた事に。そして再び巻き起こった、あの惨劇が.....

—涙を流した破壊衝動—

ストレンジャー達が住む島、テトラクリスタルアイランドその近くにある小さな島、ミドルガーデン。小島で経営するカフェでは、営業の準備が行われていた。

「うーん..... 今日はちょっと、頭が重いな.....」

カフェのオーナー兼ストレンジャー達のマスターであるラプソディは一人、店内のキッチンで本日のケーキの下準備を行っていた。だが少々体調が良くないのか、少し頬が赤かった。まぶたが少し落ち、体調が優れないのが見て取れる。

ガチャッ

作業を行っていると、キッチンの近くにある裏口から扉の開く音がした。

「おはよう、マスター」

そこへやって来たのはストレンジャーだった。いつも島で着ている式服を見に纏い、いつもと変わらぬ笑顔でラプソディに挨拶をした。

「.....あ、おはようございます。ストレンジャー君。」

声をかけられ、ラプソディはいつもと変わらぬ挨拶をストレンジャーにした。だがやはり、顔が赤いのは変わらなかった。

「？ マスター、具合悪いのか？」

ラプソディの顔色を見て、ストレンジャーは少々心配そうに問いかけた。

「い、いいえ、大丈夫ですよ。ちょっと頭が重いだけです。」

「それでも十分だけどな。無理すんなって。」

ラプソディからの返事を聞いて、ストレンジャーはラプソディのそばへと歩いてきた。

「本当に大丈夫ですよ。頭が重い意外は、体は平気ですから。」

気にしているストレンジャーをよそに、ラブソディは体を動かし元気だと言う事を主張した。その言葉の通り、体は特に異常は無く、むしろ活発そうだった。

「それでも少し心配だけだな。手伝うぜ。」

「……す、すみませんね。じゃあ、お願いします。」

ストレンジャーに押されっぱなしか、ラブソディは言葉を詰まらせつつ、素直にストレンジャーに頼んだ。

「今日のケーキも美味しそうだな。フルーツもいい香だ。」

ラブソディと共にケーキ作りをしているストレンジャーは、フルーツを切りつつ言った。その言葉の通り、切られたフルーツからは新鮮な香が飛び出し、キッチンを甘い香で包み込んだ。

「トロピカルアイランドのフルーツは美味しいですからね。ケーキもより一層美味しくなるんだと思います。」

スポンジに使用する材料を入れたボールを掻き混ぜつつ、ラブソディは相槌を打つように賛同した。

「かも知れないな。でも俺は、マスターの作るものは何でも好きだぜ。普通の料理とは、何処か違うんだよな。」

「え？」

ストレンジャーが呟くように言った事を耳にし、ラブソディは少々顔を赤くした。

「そ、そうですか??」

「ああ。少なくとも、俺は好きだぜ。」

ラブソディからの問いかけに、ストレンジャーは笑顔で答えた。その笑顔は、いつもの笑顔と何処か違い、本心からの答えのようだった。そんな会話をしつつ、二人はケーキを作っていた。その時だ。

スッ

「あ。」

何か薄いものが切れる音と共に、ストレンジャーの声がした。

「どうしましたか？」

その声を聞き、ラブソディは持っていたボールをテーブルに置き、ストレンジャーの下へ。すると、包丁には少し赤い液体が付いていた。

「すまない。ちょっと指を切っちゃった。」

ストレンジャーはそう言いつつ、ラブソディに切った指を見せた。手袋はしておらず、生身の指に小さな切れ目が入っており、少量の血が流れ出ていた。ラブソディはそれを見ると、急に目を見開いた。

ドクンッ！

『ッ！！』

そして、体が一気に熱くなるのを感じた。

「水で流しておくから、後で絆創膏くれないか？」

ラブソディの異変に気が付かず、ストレンジャーは水道で傷口を洗い流していた。傷口を洗い終わると、ラブソディがストレンジャーのそばに座り、うずくまっていた。

「？ マスター？」

ストレンジャーは慌ててラブソディの体調を気にし、顔を見た。先ほどまで赤かった顔がなおの事赤くなっており、体温が上昇しているのが見て取れた。

「マスター！！」

「逃げ...て..... スト...レンジャー...君.....」

ラブソディは両手をクロスさせ、両肩を掴みつつストレンジャーに向かって呟くように言った。体は震えており、何かを抑えている様だった。

「マ、マスター？」

ラブソディの様子がおかしい事に気づき、ストレンジャーは恐る恐る声をかけた。その時だった。

ガッ！ ドンッ！

急にラブソディは目を見開き、ストレンジャーの服を掴み、そのまま床に叩きつけられた。そしてそのまま、ストレンジャーを上に乗りにかかった。

「ッ！！ マ、マスター！？」

ストレンジャーは床に仰向けになり、自分の事を掴んでいるラブソディを見た。先ほどまでの顔色は急変し、瞳の色が朱色から真紅へと変わっていた。

「フッ..... 愚かだったな、青龍ヨ。」

ストレンジャーに目を見られたまま、ラブソディはいつもとは違う口調でそう言った。

「ッ！！ 貴様！ マスターに何をした！！」

そこに居るラブソディが本物だと知っていたストレンジャーは、乗り移ったと思われる存在に対して言い放った。

「ただ体を一時的に借りただけだ..... 青龍、お前の心を、頂かせてもらう！」

ラブソディはそう言うと、服を掴んでいた右手を離し、ストレンジャーの胸に手を当て、食い込むかのような握力で掴みかかった。

「ッグハッ！」

胸元から走る激痛に、ストレンジャーは苦しそうに声を上げた。

「お前の心さえ頂けば、力を手にしたも同然だ..... この身に足りない物全てを収めし、お前の心をナ.....」

ラプソディはそう言うと、胸を掴んでいた右手にさらに力を込め、肋骨の間に食い込むかのような力を発揮した。

「グッ！！」

ストレンジャーの胸はラプソディの指と爪が食い込み、掌に何か掴まれている様な感覚を覚えた。

ドクンッ…… ドクンッ……

ラプソディが掴んでいたもの、それはストレンジャーの心だった。胸からは少しずつ光が漏れ出し、心が出て行こうとしているのが見えてきた。

「そうだ…… コレさえ頂いてしまえば、もう邪魔をする奴はいなくナル……」

「っお前！ 俺の心をどうする気だ！」

ストレンジャーは胸元が来る激痛に耐えつつ、ラプソディに問いかけた。

「コイツに足りないものを、お前は持ってイル…… この器に足りない、力をナ……」

「ちか…ら……？」

「この器は実に素晴ラシイ…… 俺の意思を告ぐのに、十分すぎるほどの力と意思を持ってイル…… だが完璧な存在デハナイ…… それを持っているのは、お前ダ。」

ラプソディはそう言いつつ、指をゆっくりと動かし、ストレンジャーの心を奪おうとしていた。それに従い、ストレンジャーの胸には激痛が走る。

「クッ！ そう簡単に他者の心が奪えるか！」

ストレンジャーはそう言い、その場から脱出しようと試みた。だが足を動かしてもラプソディには届かず、両手は残った左手だけで抑えられてしまっていた。全身を動かそうとしても、ラプソディが乗っているため、動かない。

「さぁ…… 観念して大人しく心をヨコセ…… そうすれば楽にナレル……」

「グウッ！！ マ、マスター！！」

ストレンジャーは飛びそうになる意識を必死に留め、対抗していた。だが体はそれに反し、段々と意識が遠くなっていく。きつく閉じていた目を開けると、そこにはいつものラプソディではない顔をしたラプソディが自分の心を探ろうとしていた。

目は紅く輝き、口からは牙がむき出しになっていた。

『も……もう駄目だっ！ 限界だ！』

ストレンジャーは抑えていた体が限界だと知り、力を抜こうとした。ラプソディも勝利を確信しようとしていた。その時だ。

「ッ？」

シュッ！ タンッ！

ラプソディの顔目掛けて何か飛び、ラプソディはストレンジャーから手を離し後ろへと跳んだ

。

「ケホッ！ ケホッ……… け、剣？」

ストレンジャーは痛みから解放され、胸を押さえつつ、飛んできた物体を目にした。それは、剣だった。

「何者ダ。」

ラプソディは剣の飛んできた方向を睨みつつ、投げつけてきた正体を知ろうとした。そこには、緑色の靴を履いた存在が立っていた。

「偽者、今すぐ出て行け。」

「コ、コレージ………」

そこに立っていたのはコレージだった。投げつけた剣と同じ剣を右手に持ち、コレージはラプソディを見つつ言った。

「オセか…… 気配を消し、行った一撃は素晴らしいナ………」

ラプソディはそう言いつつ、ゆっくりとその場に立ち上がった。コレージの瞳は赤く輝き、敵意を放っていた。

「コレージ…… そのマスターは本物だ……… 切るな………」

ストレンジャーはそんなコレージを見て、止めようとした。だがコレージにはその言葉は届いておらず、ゆっくりと間合いを詰めていく。

「消えないというのなら、その身を赤く染めてやろう。」

コレージはそう言うと、その場を走り出し、ラプソディに攻撃を仕掛けた。

「フッ、甘イ。」

相手からの攻撃をジャンプで軽々と避け、ラプソディはそのままキッチンの窓辺に降り立った。

「またの機会にスルカ……… いずれその心を頂かせてモラウ。」

ラプソディはそう言うと、窓を突き破り、何処かへ消えてしまった。

「……ストレンジャー、しっかり。」

敵が去ると、コレージは倒れていたストレンジャーの無事を確認した。

「あ、ああ……… どうして、攻撃を。」

ストレンジャーはゆっくりとその場に立ち上がりつつ、攻撃をした理由を聞いた。

「そうするしか無かったんだ。アレは説得では止められない、ストレンジャーもそれは分かっていたら？」

コレージはそう言うと、ストレンジャーは黙った。そう、分かっていたのだ。口だけでは止められない事を。

「アレはマスターだがマスターじゃない。体を乗り移られてしまったようだ。」

「乗り、移る………」

「だが再びストレンジャーの元へ来るのは確実だ。奴の狙いはストレンジャー、お前の持つ心だからだ。」

「どうして、俺の心を………」

ストレンジャーはそう言いつつ、自分の胸の前に手をかざした。すると、光に包まれた自分の心が少し、顔を出した。

「マスターの足りない物を全て持っているからだ。ストレンジャーは作られた存在の中で、全ての意思を注ぎ込まれている。」

コレージはそう言いつつ、ストレンジャーの心を見た。暖かい光を放ちつつ、優しい鼓動を放つ塊が、そこにはあった。それを求めようとするものは、どんな手を使ってでも手に入れようとするのであろう。

「マスターの意思……」

「とりあえず、マスターを止めよう。嫌な気配が廻りに満ち始めてる。」

コレージはそう言うと、破られた窓から外を見た。外の天気は段々と暗くなり始め、青空が空から次々に雲で隠れた。二人はカフェの後始末をし、鍵を閉め、テトラクリスタルアイランドへと向かって行った。

## 始まり

---

『……フッ さすがは私の姿を基にして創られた存在だ。私の行動にそつなくついて行けるだけの力が備わってイル。』

カフェでの獲物を一時逃したラプソディは、海面を飛び跳ねる様に走り、別の島へと向かっていった。普段のラプソディの体力ではありえないほどのスピードで走っており、履いている靴底すら海に沈まない速さで進んでいた。まさに、駆ける天狼である。

『さて…… 終焉を始めるにハ、彼等の力が必要だな。後継者にふさわしい奴ハ、あの場所にイル。』

ラプソディの考えが纏まった様子で、踏み入れた海面を思い切り蹴り、空へと飛び出した。そしてそのまま、目の前に聳え立つ灯台と城へと向かって行った。

「……さっきまで、あんなに天気が良かったのに。」

カフェを後にしたストレンジャーとコレージは、空へと飛びだし、自宅のあるテトラクリスタルアイランドへと向かって行た。だが空の雲行きが怪しく、先ほどまでの晴れ間は何処へやら。

今は空全体が濃い雲で覆われていた。そのため、辺りが少々薄暗い。

「きっと、マスターがああなったから、空がこうなったんだろう。何かが動き出した、そう見るしかないな。」

「マスター……」

ストレンジャーの隣を飛ぶコレージはそう言うと、ストレンジャーは呟く様にそう言った。彼には翼は無いものの、羽織っていたマントの形状を変え、翼の様にして飛んでいた。元々翼のあるストレンジャーは、大きく翼を広げ、飛んでいた。

「あ、ストレンジャーさん！」

二人が島へと到着すると、ストレンジャーの自宅からビリーブが外へと出てきた。その手には、一冊の古い本らしき物が持たれていた。

「ただいま、ビリーブ。」

「ストレンジャーさん。マスターを知りませんか？ 会いに行ったと思ったんですけど……」

ビリーブはそう言いつつ、少し心配そうにストレンジャーに言ってきた。顔色が少し、良さそうでは無いと思ったからだ。

「ちょっと大変な事があってな。ビリーブ、皆は？」

「皆さんなら、いつも通りの生活を送ってると思うんですが…… 大変な事って？」

コレージの言った事に対して、ビリーブはそう言うと、再び問いかけた。

「…… マスターの様子が変なんだ。」

ストレンジャーは少し寂しそうに、ビリーブに言った。

「え！ ま、まさかそれって……」

「ストレンジャー！」

ビリーブが言おうとした事を遮り、ストレンジャーを呼ぶ声が空からした。

「ホープ、ホネスティ。」

「ねえストレンジャー！ マスター知らない！？」

島へと降り立ったホネスティは、ストレンジャーの元へと移動し、服を掴み必死に問いかけてきた。その様子は、いつもとは違う様子だった。

「……何があったんだ？」

「マスターが……… アリス様を！」

「何だって！？」

「ストレンジャー！ 大変だ！！」

ホネスティの言った事を問おうとした途端、再び空からストレンジャーを呼ぶ声が、島に広がった。

「プロミス、ブラベリー」

「テュード、マスター！」

「テュードがマスターに誘拐された！」

ブラベリーが言った事をさておき、プロミスはその場にいた全員にそう言った。

「え！？」

「………やっぱり。もう……」

その場にそろった全員の言った事を聞き、ビリーブは残念そうに呟き、その場に座り込んでしまった。

「ビリーブ。いったい何が起きているんだ……？」

何かを知っていると思われるビリーブを見て、ストレンジャーは問いかけた。

「『ラグナロク』を、ご存知ですか？ 皆さん。」

「！！」

ビリーブが言った事に対して、その場にいた全員は、血の気が引くような感覚に襲われた。そう、それはあくまで伝説として話されている、神や高貴の存在達が姿を消したといわれる、大戦争だった。神ですらその戦いを沈静する事が出来なかったとされる、悲惨で残酷な戦闘。そしてその戦いに関係する、数人の存在達。

「ビ、ビリーブ…… まさかそれって。」

「はい。おそらくマスターは、本物のフェンリルに意識を奪われてしまったんだと思います……」

プロミスの言った事に対して、ビリーブはそう言いつつ、持っていた本を開いた。本のページには、小さな字で何かが書かれていた。

「この大戦争を、僕のご先祖様が予言していました。これは、その事が書かれた預言書。つい先日、セレモニースラインからこれが見つかりました。」

「じゃあ、今のマスターは、コレを実現させようとしているって事なのか!？」

ビリーブが言った事に対して、ホープがそう言うと、彼は頷いた。

「おそらくチェリーさんとテュードさんが襲われたと言う事は、フェンリルの兄弟であるヨンムンガルドとヘルの意識を乗り移させるため……」

「じゃあ、もう戦いを始めるための鍵は揃ったって事になっちゃうのか…… いきなりこんなやばい状態になるなんて。」

「マスター……」

一通りの話を聞き、コレージとブラベリーはそう呟いた。

「急いで、マスターを止めないと、」

「その必要は無イ。」

ホネスティが言った事に対して、何処からか声が聞こえた。その場にいた全員が、声のした方角を見た。そこはストレンジャーの家の屋根の上、そこに三つの影が降り立った。

「マスター！」

「アリス様！ テュード！！」

行方不明となっていたチェリーとテュード、そしてラブソディがいた。

「フェンリル！ マスターを返せ！！」

「それは無理な要望ダナ。この体は実に良く我の色に染まってくれてイル。これ以上の存在はイナイ。」

ラブソディはそう言うと、不気味な笑みを浮かべた。

「お兄様、彼が必要としているターゲットなノ？」

「へえー 兄貴、結構いい存在を見つけたんだー」

操られたテュードとチェリーはそう言いつつ、一人の存在を見つめていた。その存在とは、もちろんストレンジャーだった。

「貴様等、ストレンジャーをどうするつもりだ！」

コレージはそう言いつつ武器を手にし、四人の間に入り、ストレンジャーを守る体制に入った。

その様子を見て、ビリーブ達も武器を次々に持ち出し、護衛する体制となった。

「さっきも言ったはずだが、一応言ってやろう。」

ラブソディはそう言いつつ、三人は屋根の上からゆっくりと地面へ向かって降り出した。だが重力に逆らうように、ゆっくりと下降していた。

「我が使っている体は実に素晴らしいガ、完璧では無イ。この存在の体を完璧にするニハ、不足分の力を持つ存在の結晶必要ダ。それが『ストレンジャー・ザ・ドラゴン』 貴様ダ。」

ラブソディはそう言いつつ、視界にストレンジャーの姿だけを映した。

「それで俺を襲ったわけか。マスター、こんな事をしてまで、どうして俺の心が欲しいんだ。こ

んな醜い戦争なんて、マスターが臨むはず無い。」

「そうだな。だが貴様は言った事があつただ口ウ。『存在が行動を起こすにハ、必ず理由がある』ト。我は理由がアリ、その行動を起こすだけダ。」

ラプソディはそう言うと、後方で飛んでいたテュードの体に乗出した。同じくチェリーもテュードの体に乗、彼の体にしがみついた。

「時期にラグナロクの火蓋は切って落とさレル。貴様等が戦争の終焉を望むナラ、来イ。アースガルドへ……」

「マスター！」

ラプソディはそう言うと、テュードは高度を上げだし、空に出現したワープホールへと吸い込まれて行った。

『……けて…… ス………ジャー……君……』

吸い込まれる寸前、ラプソディの口元が微かに動き、何かを呟き、三人は姿を消した。

「……ッ！ アリス様！！」

「どういう事なの…… 私達が、何をしたって言うのよ……！」

ホープとホネスティはそう呟きつつ、地面に崩れた。その後ホープは地面を叩き、二人はそのまま涙を流した。

「マスターを、助けないと。」

そんな二人の様子を見つつ、ストレンジャーはその場を歩き出した。

「ストレンジャー！ 正気か！？」

「マスター……いや。アイツはストレンジャーが目当てなんだぞ！ みすみす自分の体が動かなくなる事をわかってまで、何で行くんだ！！」

プロミスは歩くストレンジャーを見て、そう叫んだ。その場にいる誰もが同じ考えのため、数メートル先に立つストレンジャーに、視線を向けた。

「マスターが望んでいない行動を、俺は行わせるわけには行かない。……それに、今のマスターにも意識は残っていた。」

「え……」

ストレンジャーの言った言葉に、全員は驚いた。

【助けて…… ストレンジャー君……】

去り際にラプソディが言っていた言葉を思い出しつつ、ストレンジャーは再び前を見た。

「俺は行くぜ。たとえ、この体が動かなくなっても、マスターを助けてみせる。」

決意を新たに、その場にいたビリーブ達の方へと振り向きつつ、ストレンジャーは言い放った。

「そう言うと思っていた。ストレンジャー」

ストレンジャーの決意を確認し、コレージはそう言いつつ前へと歩き出した。

「お前がマスターの元へに行くなんて、百も承知だ。」

「コレージ。」

「ま、最終決戦にはふさわしいんじゃないか？ そういう行動も。」

二人を見て、ホープも同じく前へと歩き出した。

「ラストにふさわしいフィナーレ。奏でようぜ。」

「ホープ。」

「……そうですね。ストレンジャーさんが、危険でも行かないなんて行動。今までありませんでしたし。」

「創られた存在には、ふさわしい行動をするだけ。間違いじゃねえな。」

「危険……でも、行く……僕も……」

「そうね。アリス様やマスターが待ってるんだもん。」

その場にいた全員が、口々にそういう、ストレンジャーの元へと集まった。

「皆……」

「俺等も行動を共にするぜ、ストレンジャー」

「マスターやチェリー テュードを迎えに行こう。」

皆の明るい声援と行動を見て、ストレンジャーは目に涙を浮かべた。その後、右手で涙を全て拭い、ストレンジャーは言った。

「ありがとう。皆……」

ラグナロクへの火蓋が、今。 切って落とされた。

## 狼との関わり

---

その場に居た全員の意味が固まり、ストレンジャー達はラプソディとの会話後しばらくして、皆を島の中央にある噴水広場へと集めた。そこでは今後何が起こるかわからない、崩壊を目の当たりにする事を覚悟した存在達が集まっており、皆が皆少し落ち着かない様子で、その場に立っていた。

「皆、心の準備はいいか？」

そんな存在達の様子を気にしてか、泉の前で行き先とこの島とのワープホールを繋いでいたストレンジャーが問いかけた。

「準備も何も、後はワープして行動を起こすだけよ。」

ストレンジャーの問いかけに対し、軽くその場で腕周りのストレッチを行っていたホネスティが言った。他の存在達に比べて一回り小さい彼女だが、意思は皆と同じく大きいものを示していた。

「チェリー様のために行動を起こす、テュードを正気に戻す。それだけではない行いをするため、私達はここに居ます。」

「犠牲者は絶対に出さない、そうだろ？」

そんな彼女を見て、チェリーの元で働いているティザーとプレスルが言いつつ、ストレンジャーの方へと顔を向けた。そこには騎士と使用人らしい整った顔をしており、行いの目処はあらかじめついている様子だった。

怖いのは誰もが同じ、でもやるしかない。

そんな単純な事だが、重大なことに対しての意思は固めてある。揺らぐ事は無い。彼らの目は、そんな意思を示していた。

「.....皆、やっぱり意思は俺と一緒になんだな。正直、俺は怖いのに皆は強いな。」

「そんな事無いわ、ストレンジャー」

その場に居た存在達の間を見て、ストレンジャーはそんな事を言った。誰よりもラプソディやチェリー、テュードの事を正気に戻したいと思っていたが、少しだけ決心が揺らいでいたようだ。呟くように彼は言うと、近くに居たアルドールがストレンジャーの手を握った。

「私だって怖いけど、ストレンジャーの事を見てるとやり遂げたいって気持ちになるの。」

「そうだな。俺等の意思その物を辿ると、ストレンジャーの考えに値するぜ。」

「僕達だってやる時はやります。でも、ストレンジャーさんが一番その考えを起こせるんです。」

アルドールがストレンジャーにそういうと、ピスフリーとビリーブも同様に言った。彼であろうと彼女であろうと、誰もがやりたい事は一緒、怖い事も一緒だと。そんな励ましが、彼の心を少しずつ暖めた。

「だからこそマスターの体を使っている奴は、ストレンジャーの事を欲しがってるんだ。俺らの考え

そのものさえも変えてしまう、お前の力を。」

「マスターが、俺の事を……」

そんなストレンジャーに対してコレージはそう言うと、彼は改めて自分の存在価値を知った。誰よりも強く、誰よりも気高く、そして誰よりも強い意思を持つ事が出来る。

自分は龍であり、力の象徴でもある。自分が全てを願えば、叶えられるだけの力がこの体にあった。ラプソディの思いを、たくさん受けたこの体だけは。

「……分かった。皆、俺と一緒にマスターを助けてくれ！」

「ああ！」

「もちろんよっ！」

「あたりまえだっ！」

改めて知った自分の事を思いつつ、ストレンジャーはその場に居た全員に向かって言った。すると、その号令を聞きその場に居た全員が次々にその声に賛同するべく、名乗りを上げた。自分の声一つでここまで動かしてしまう事は恐ろしい事でもあった。だが、それでもストレンジャーは諦めない、必ず助けるという意思を皆に与え、それを受けたのだ。

力が一つになれば、何でも出来る。たとえ、この先何があっても……

そして、操られたラプソディ達が待つ『アースガード』への道が出来上がると、ストレンジャーを初めとした存在達が次々にワープホールに飛び込んだ。この地にもしかしたら戻れないかもしれない。だが、この先に大切な人達が待っている。迎えに行かなければならない。その思いだけで、皆の足はその方向へと向けられたのだった。

彼らがワープホールへと飛び立つと、しばらくの間は白い空間が広がっていた。体は自然と前の方へと運ばれていき、時間をかけて全員は目的地へと降り立った。着いた場所は、静かな草原の上のようだった。空は青く澄んでおり、こんな所に呼び出されたのがまるで罨なのかと思うくらい平和な場所だった。これから二つに分かれて争うと思われていたストレンジャー達は、少し意外そうに辺りを見渡していた。

「……素敵な所……」

「戦場っぽい所に呼ばれると思ってたのに、少し意外ね。」

空気も澄んでおり、深呼吸をしながらアルドールは呟くと、辺りを警戒しながら心配損だったのかと言うかのようにジョイは言った。戦わなくて済むのならそれの方が言いと考えていたストレンジャーは、その様子を見ながらあたりを少し見るためその場所から移動しだした。そんな彼を見て、他の存在達も慎重な草原を歩いていった。

「なあ、ストレンジャー これ、罨だと思うか？」

先導をきって何かあるかどうか見ていたストレンジャーに対して、後ろを歩いていたピスフリーが問いかけた。

「争うと思っていたのに、平和な場所だったからな。罨にしては、少し殺風景で奇襲はなさそうだが。」

「辺りの急変はありえる。罨かどうかは分からない、だろ。」

「あ、ああ。」

問いかけに対してストレンジャーはそう答えると、コレージが軽く察しながらそう言った。最近の彼は読心術を使わなくても、しばらく接していた相手の考えくらいなら読める状態のようだ。いつも通りの表情で、コレージはそう言った。

「とりあえず、マスターを探そう。ココに呼んだって事は、必ず居るはずだからな。」

「そうですね。」

とりあえず警戒だけはしておこうという事に決まり、ストレンジャーの意見にビリーブは賛同した。先ほどまで彼が持っていた本は既に手元には無く、彼らの荷物は武器だけのようだった。これから何が起こるかはわからない状態でも、必ず彼らは行動を起こしてくる。それだけは分かっていたからこそ、行動もそう決まったのだろう。

草原をしばらく歩いていると、目の前に裂け目によって出来た山の通路があった。壁のようにそびえ立つ山の一角に、まるで地震等の自然の影響によって出来たのかと思う通路が一つあった。まさに奇襲にはピッタリの場所だが、彼らの行き先は特に無いがこの先に何かあるのだろうと思っただけで、そのまま進みだした。

相手の狙いは『ストレンジャー自身』という事を分かっていた皆は、彼のガードをするように行動しだした。数人の空を飛べる存在達は中を警戒しながら飛んでおり、地上戦を好む存在達はそのまま彼の移動を妨げないよう配置に付いた。もちろんストレンジャー本人もその行動の意味を知っていたため、武器を手にしたまま、彼らに身を預けていた。信頼と、そして思い。彼にはそれが良く分かる、この行為だった。

特に奇襲も無く一行が進むと、視線の先に道の終わりと思われる場所が見えた。崖縁の道が終わり、広い所に出られそうだった。

「あ、見て！ 先が開けてるよー」

一足先にその光景を目にしたホネスティは、下を歩いていたストレンジャー達に向かって言った。一斉にその先を見て、警戒していた皆は少し安心した様子を見せた。

「広い所に出れば、強襲は免れそうだな。」

「だが過信は禁物だぜ。 注意して行こう。」

「了解ー」

ラッパに座ったままその場所を見たホープがそういうと、下を歩いていたプレスルが付け足した。依然として緊張感は取れないままだが、狭い場所よりはマシと皆はその場所へ向かって駆け出した。

一行が道を抜けた瞬間、皆は驚愕した。

「……！！」

「血の……臭い……」

あたり一面は先ほどまでの草原とはうって変わり、焼け焦げた荒地に近い状態の場所と化してい

たのだ。その上空は曇天へと変わっており、辺りの空気も先ほどの新鮮なものと違い、鉄の焼けた臭いと血の臭いが混じった居心地の悪い空気が漂っていた。慌ててビリーブはストレンジャー達の辺りの空気を浄化するべく、札を使い効力が強い浄化の魔法をかけた。

「悪いな、ビリーブ。」

「それにしても、酷いですね…… コレじゃまるで、戦争じゃないですか。」

浄化の魔法をかけてもらい札を言うストレンジャーに対して、ビリーブはとても悲しそうにそういつつ先の崖縁へと向かった。そこから見えた光景は、互いに武器同士が重なる金属音と共に叫び声に等しい声だった。地面の所々には亡骸が転がっており、血の池も所々にあった。子供が見ていい様な光景とは言えず、とても気分の悪い場所だった。

「争い…… コレが、神と悪魔達の戦いなののでしょうか。」

「『アースガルド』では、再び同じ結末を描かれてしまう光景が蘇ったのだ。」

「？」

ビリーブの呟き声に反応するように、彼らの後ろで声がした。敵かと思い、慌てて周囲に居た存在達はストレンジャーを守ろうと周囲に集まり、声のした方向を見た。

そこには一人の人が立っており、若くもあるが凛々しい青年が居た。身につけている衣装は高貴な武装だったが、何処か普段着のようにも見えた。

「貴方は。」

「『テュール』という者だ。 君達はココの存在達ではないようだが、どうしてココに。」

テュールと名乗る青年は、この世界の存在達ではないと見たストレンジャー達に、ココに来た目的を問いかけた。敵では無いと思ったのか、ストレンジャーは回りに居たピスフリー達をたしなめる様に合図をして、少し前に出た。

「ここに、操られている俺達の仲間が三人来ているはずなんだ。」

「空色の翼を持った蛇に、桃色の服にブロンドヘアーの少女。」

「そして、狼の青年が一人居るはずなんです。ご存知ないでしょうか」

「！！」

ここに来た目的を軽くストレンジャーが説明すると、ティザーとアルドールが探している人達の特徴を述べた。その三人の特徴を聞いたテュールは、驚いた表情を見せた。

「君達は…… フェンリルの知り合いか？」

「『フェンリル』 マスターか！？」

「……その様子だと、知り合いだな。」

少し意外な反応をした後、テュールはその人物を知っているかのように問いかけた。変わって今度はストレンジャーがその言葉に驚き言うと、テュールは納得したようにそう言った。

「私は、かつてあの存在の面倒を見ていたものだ。……だが、今このような事になってしまった。」

「テュールさん。貴方は確か、アールガルドに連れてこられたフェンリルさんのお世話をしていたんですね。」

「そうだ。ここへ身勝手ながらも我々の所の者が連れて来られたのを見てな、私が世話をしていた。」

訳があるように言うテュールに対して、ビリーブは自分が知っている範囲で彼の事を聞いた。するとそれが正しい事を見つけ、彼とフェンリルとの関わりをかいつまんで話をしていた。

かつて『アースガルド』で『ラグナロク』が行われるきっかけが始まるその前の頃。家族と離れ離れになってしまった魔物一家の長子、フェンリルがやってきた。彼には弟の『ヨンムンガルド』と言う弟と、『ヘル』と言う妹が居たが、その時はその二人の姿は無く、一人だけその地にやってきた。何故その場所に連れてこられたのかは彼も知らず、連行してきた神の戦士達は彼を連れてきた後は、軽い監視をするだけで、それ以外は何もしなかった。

だが何分魔物一家の狼とだけあり、体は普通の人よりも大きく鋭い牙を持っていたため、戦士と言えど自らよりも大きい存在に食事を好んで与えようとするものも居なかった。そんな中、たった一人だけ彼と接触したのが『テュール』だった。

元々『力の神』と呼ばれていただけあり、彼は多少恐れはしたもののフェンリルに食事を与える行動を進んで行っていた。もちろんただ単にその異名を守るためだけではなく、彼にはその狼がただの狼だとは思わなかったのだろう。何かを、感じていたようだった。

## 犠牲を払ってでも

---

当時まだ生きていたフェンリルは、そんな彼の行動が少し異様だと思っていた。誰もが恐ろしく近寄らなかつた自らの元に、彼だけが食事を運び、時をしばし共にしていた。彼が食べている時は静かにその様子を見守り、また監視下の中昼寝をしていたりすると、テュールもそばにより休息を取っていたりしていた。

もちろん当初はそんなテュールに威嚇をしていたフェンリルだったが、次第にそんな気分にならなくなり手を出さない事をわかると、好きにさせていた。だが平和な時間はそう長くなく、監視をしていた神達に異変が現れた。

それはとある日の事。いつも通りフェンリルが食事をし終え休息を取っていると、兵士の一部が自らの足を拘束しようとしていたのだ。その様子を見て縛られた縄をフェンリルは引きちぎり、彼らを威嚇した。元々テュール以外の存在達を信用していなかつたフェンリルは戸惑うことなくその行動を見て脅かした。もちろんそれ以上の抵抗があるようならば、彼も彼なりに応戦しようとも考えていた。

一度縄を切った後、今度は鎖で縛ろうとしていた奴らも現れた。だがそれも縄の時同様、彼は軽々と引きちぎり、威嚇した。魔人の子でもあってか、力がある事を知る神達もその様子に毎度恐れを抱いていた。その中、テュールだけは彼に何も危害を加える事無く、いつもどおり食事を運んできてくれた。その時だけはいつも静かだったため、フェンリルも苛立つ事無く静かに時間を過ごせていた。だがある日、彼にも異変が現れた。

それは、そんな縄と鎖を持ち出した奴らが数日間目の前に現れなくなつた頃だった。いつものように食事を運んできてくれたテュールは、その日はフェンリルの元に運んだ後、食事の様子を見ていた。だが、彼は笑顔ではなく、涙目だったのだ。

「……………何故泣いてイル。」

「あ…… ……………」

ふとそれは異常だと思い、フェンリルは口を開き問いかけた。その問いかけを聞き泣いている事を悟つたテュールは、あわてて目元を手で拭った。そして、再び彼に笑みを浮かべた。だがやっぱり、涙をかすかに流していたのだ。

「……………」

「………本当に、済まない。」

フェンリルは静かに彼の様子を見ていると、テュールはそう呟いた後、食事を載せた皿を回収せずその場を走り去ってしまったのだ。そしてその様子を、フェンリルはただ静かに見守る事しか出来なかつた。その後、何かが起こるのであろうと彼は悟つたが、何も言わなかつた。

彼に対しては、何も言う気にはならなかつたからだ。他の存在と、一緒だと思ったから。

そして次の日の事だ。テュールを含めお偉い神々達が総動員で、フェンリルの元に集まってきた。静かな休息を邪魔され静かにその場に起き上がったフェンリルは、一人の申し出を聞いた。『ここに一つの縄がある。君がこの縄を切ったのなら、ココの監視から釈放しよう。どうかな。』

もちろんそれは罠だと思い、早々にフェンリルは申し出を請け様とはしなかった。二回あった拘束時の彼等とは違い、余裕の表情を彼らは浮かべていたからだ。何か力を埋め込んだ物なのだと、彼は悟り一つの条件を出した。

「我に縄を結ぶのなら、誰かの腕を口の中に入れされ口。そうしたら条件を受けよう。」  
駆け引きに近い取引だったが、フェンリルはそういった。その申し出を聞き一部の神達がざわめき始めた。そう、誰もそんな度胸を持ち合わせているはずがなく、彼の鋭い牙を突きつけられたのなら、確実に腕は持っていかれる。そんな事を代表して行おう者など現れるはずがないと、両者は思っていた。

しかし。

「私の腕を、差し上げよう。」  
ざわめき始めてから数秒後、一人の青年がその申し出を飲むと言い出した。そう、それはただ一人フェンリルがこの場で心を半分許していたテュールだったのだ。その声を聞き神々は次々と賛同だし、フェンリルは多少顔をしかめた。

その後彼の口の中にテュールの腕が入れられ、フェンリルは縛られはじめた。

「何故入れタ。……貴様の名のためカ。」

「違う……… これは………」

どんどん縛られていく中フェンリルが問いかけると、テュールは腕を入れたままそう呟き、涙を流した。やはり何故涙を流すのかが分からず、フェンリルは首をかしげた。そして、縄を結ばれ彼は約束どおり解こうと試みた。だがしかし、それは魔法によって生成された縄で切れない事を、彼は今知ったのだ。

「！！ やはり罠カ！！」

ガブシュッ！

「グワァアッ……！」

「今だ！！」

縄が解けない事を悟り罠と理解したフェンリルは、自らの口の中に入れたテュールの腕を問答無用で引きちぎった。その痛みにテュールは痛みを覚え、その場で苦しんだ。そして、次々と待機していた神達がフェンリルを拘束しだしたのだ。

部の悪い駆け引きに彼は負け、この場で処刑されるのだと分かった。抵抗も空しく彼の口の中にあごを動かさないほどの大きな岩を詰められ、しまいには剣を口の中に向けて突きつけられた。その行動に彼も痛みを覚え、テュールを見た。無くなった腕部分を抑えつつ彼は必死に痛みを耐え

ていた。ふと彼が目をやった瞬間、二人の視線があった。

そして、こうかすかに呟いたのがフェンリルに見えた。

『済まない……』

その後フェンリルは、たくさんの拘束と拷問を受け、逃げられない場所へと送られ命を絶ったのだった。

「……………」

「なんて、酷い事を……」

テュールからの経緯を聞いたビリーブは、涙を流しながらそう呟いた。何処からともなく風が皆の下に吹くと、彼のマントがなびき、右腕が無い事をその場で見せた。

「なんとしても彼を止めたかった。だがそれはすでに遅く決断が行われた後だった…………… 彼にしてみれば少なすぎる代償に、私は腕をささげた。」

「……………」

「貴方は、心からフェンリルさんを思っていたのですね。たとえこんな争いが起きたとしても。」

「ああ……」

再びあの事を思い出し、テュールは軽く涙を流しながらそう言った。その話を聞きあっけにと取られていた皆を置き、ティザーはそう言うと、テュールは同意した。

「だからこそ、もう一度この戦争を行って欲しくなかった。君達がここに居るというのは、きっと選ばれた事なのだろう。頼む、彼の目を覚まさしてやってくれ。彼は……………！」

「……ストレンジャー」

話を聞きテュールの願いを聞き、皆の視線がストレンジャーに集まった。そう、今のフェンリルが求めているのはストレンジャー自身だ。だからこそ、決断も彼が決めるべきと皆は彼の言葉を待っていた。

そして、こう言った。

「だからこそ、俺らもココに来たんだと思う。テュール、俺に任せてくれ。」

「……ありがとう。」

彼が断るわけも無いと思っていたのもあってか、テュール以外は表情をあまり変えはしなかった。だが、テュールはその言葉を何よりも嬉しいと感動していた。今の彼の目を覚まさせるのは、彼しかいないと分かっていたからだ。

「……！ 危ない！」

「ッ！」

ガキンッ！

そんな話をしていると、ストレンジャー達の後方崖下の戦場から皆を見つけた敵が襲い掛かった

のだ。それを見て、テュールは残っている左手で剣を引き抜き、その攻撃を防ぎ、なぎ払った。

「時間が無い。彼はこの先の場所にいるはずだ、行ってくれ！」

その後襲ってくるであろう敵の大群を一瞥した後、テュールはストレンジャー達に向かって叫んだ。唐突な事で戸惑っていたストレンジャーは、その言葉を聞いて一瞬戸惑った。

「だ、だがテュール！」

「私が負けるわけが無い。そう、彼のあの表情を見るまで、私は負けない！」

ストレンジャーの言った事を聞きそう叫ぶと、彼は崖下の戦場へと向かって飛び降りた。慌てたストレンジャー達はいっせいに崖下を覗き込み、彼が無事下に降りて応戦している光景を目にした。

「ストレンジャー。急ごう。周りの空気が一変した、ココはマズイ。」

テュールを見た後、コレージは周りの空気が一変したことをストレンジャーに告げた。もう戦争は始まり経過した事を知らせており、時期に自分達も巻き込まれる事が予想できた。そう、逃げられない事を。

「テュール………」

コレージにそう告げられ、行動しなければ本当に手遅れになる事を知り、ストレンジャーはその場から駆け出した。もう犠牲を出さないでいいような状況にはいられない事を知り、涙をこらえて走る事しか出来なかった。そんな彼の様子を見て、他の存在達は彼の心境を知りつつも、後を追いかけた。

無事に終わらせるものなら、最善の方法を選ぼうと。逃げられないのなら、なおさら。皆は決心したのであった。

『……酷いな。コレは……』

急遽場所を移動し、ストレンジャー達は操られたラプソディ達の居ると思われる場所に向って移動していた。事態は深刻な方向へと向っており、思った以上に深刻化していることを先ほど知った。そのため、ストレンジャーは移動速度の速い翼を使い、羽ばたいて移動していた。

同様に空を飛べる存在達は空を飛び、飛ぶ手段を持たない存在達はグロウの背中に乗り、移動していた。移動する際大地を見ると、所々に血を流して倒れている亡骸がたくさんあり、元々こういう環境に慣れていないストレンジャー達にとって視界に写るものすらも毒だった。だがこんな所で立ち往生しているわけにも行かないため、ビリーブの施した魔法の効力を頼りに移動していた。

しばらく移動すると、曇天が広がっていた大地に一部明るい場所があった。雲に遮られていた空から多量の光が降り注いでおり、その場所だけ惨い争い毎からシャットアウトされている部分があった。よくよく見ると、そこには三人の人影があった。

「……！ マスター！」

「居たか！？」

視界に写った存在の1人がラプソディである事に気がつき、ストレンジャーは思いきり彼に向って叫んだ。その言葉に反応し、後方を飛んでいた他の存在達も続々と彼の見つめる先を見た。その声と集団を見てか、ラプソディは不気味な笑みを浮かべた後、ストレンジャー達のいる場所を軽く指差し指示を出した。

すると、後方に待機していた黒い軍団が一斉に飛び出し、ストレンジャー達に向って襲い掛かって行った。

「チッ！ 敵かっ！」

「もうっ！ 面倒ね！！」

敵の襲来を目撃したホープはそう言いつつ、ラッパから降りつつグロウの背中に飛び降りた。そんなホープの声に反応して、同様にグロウの背中に乗っていたジョイは武器を召還し、敵に向って多量の水を発射した。同じく他の存在達もそれぞれが出来る遠距離攻撃を次々に開始し、襲い掛かってくる敵を次々と打ち落として行った。

だが敵の数は多く、少数になってもたどり着いた敵は次々に先頭を飛んでいたストレンジャーに襲い掛かった。

ガキンッ！

「クッ！」

「ストレンジャー！」

襲い掛かってくる集団の攻撃に剣刃を向け、攻撃を受け止めたストレンジャーは相手を見つうなった。相手は本当に黒いだけの集団であり、意識すらあるのかどうか分からない不透明な存

在ばかりだった。神が退治する敵、悪の塊なのであろう。退治するだけで嫌な気分させてくる、敵だった。

その後どんどん敵は増殖しだし、次々と後方に飛んでいた存在達めがけて襲い掛かって行った。もちろんそれだけではやられないのも彼らであり、必死に抵抗し突破口を探していた。こんなところでやられるわけには行かない。助けるべき存在が今目の前に居るから。

助けたい、ただそれだけの思いを胸に戦っていた。

「チッ、奥の手だったから抑えておきたかったが…… 仕方ないなっ！！」

「……まさかっ！ 駄目よホープ！ それは禁じ手じゃないっ！！」

すると、不意にグロウの背中の上から攻撃をしていたホープがそういい、ラッパを持ち直し演奏する体制に入った。不意にそれを目撃したホネスティは、驚きつつ彼に向かって叫んだ。

「もう犠牲無しには行けない。ならば、俺はココで本気を出すまでだ！！ 雷鳴よ……俺の愛する友のために、突破口を作るんだ！！」

「ホープ！」

「ストレンジャー！ 行け！」

その行動を目撃しストレンジャーも同様に叫んだが、不意に別の角度からの声に反応した。声のした方角を見ると、そこにはティザーの乗る箒に捕まり左手だけで応戦しているプレスルが居た。

「ホープのこの魔法は代償が大き過ぎる！ だから、無駄にはしないでくれ！」

「アリス様を頼みます。プロミス、ブラベリー！ 貴方達もよ！」

一瞬の間を付きそう叫ぶプロミスに反応して、ティザーも同様にそういつつ敵の相手をしてきた。皆応戦するのが精一杯の状況であり、これ以上持ちこたえるには体力の消耗が大きすぎると判断したのだ。隊長ならではの、迅速な対応だった。

「だがティザー！」

「主人を助けるのは使用人の俺等じゃない。友人のお前らだ！」

「お願いよプロミス！ 貴方達だけでも、アリス様の下へ行って助け出して！」

「皆……！」

「ストレンジャー頼むわ！ 貴方だけでも！」

「そうよ！ マスターを救えるのは、貴方だけ！」

プレスルとティザーの言う作戦に賛同し、ジョイとアルドールもそう言った。二人も微力ながらもストレンジャーの前の敵と応戦しており、彼女らも突破口を作るために必死に戦っていた。そして同時に、助けられるのはストレンジャーだけだと言った。

「行ってくれ、ストレンジャー」

「コレージ。」

その声を聞き、ストレンジャーの近くの敵をなぎ払ったコレージも同様に言った。

「この行動は犠牲ではない、思い全てだ。それを無駄にするわけにはいかない、チャンスを不意

にするな。」

「……分かった。」

「プロミスとブラベリー、それイノセントもだ。まだ消耗していない力を生かせる奴は、皆行け！」

すでに戦いに挑んでいるプレスル達に代わって、コレージは状況を判断しそう言い放った。ストレンジャーと共に行動し、三人と応戦するのは彼らしかいない。もう、迷っている時間は無い。そう悟り、指名された三人は軽く頷いた後、アルドールとジョイが切り開いた突破口と突き進んで行った。そんな三人を見て、ストレンジャーも後に続いていった。

「皆、無事で居てくれ……」

「分かってる。行って来い。」

「……ああ。」

別れ際にストレンジャーは皆にそう言うと、コレージはそう言い見送った。もちろん無事で居られる保障など無い今だが、なにもせず負けるくらいなら犠牲を払ったほうがいい。コレージが一番それを理解し、優先的に力の強く応戦できる人選をしたのだ。その後見送ったコレージは、集団になり応戦している皆の下へと行った。

ホープの奏でる楽章により傷つく存在に弱化される敵、歌により力を生かせるこちら側と次々に効力を発揮して言った。攻撃も補助も行い、かつ多量の敵でも問答無用で落とすのがホープの切り札だ。

……だが、

「…………ツ！」

「ホープ！ しっかり！」

全ての楽章を奏で終わると、ホープはその場で意識を失い、グロウの背中から落ちてしまった。急いで助けようとするグロウにも攻撃の放火が飛び交い、次々に彼の体も傷つけていった。それでも必死に手を伸ばしホープを助けたグロウは、そのまま大地に突撃してしまった。

「グロウさん！」

「仕方ない。地上で応戦だ！」

「ああ！」

急遽戦いの場を空から地上に変えると、コレージは一足先に両手に剣を持ち敵をなぎ払いつつグロウ達の元へと向って行った。その後を他の存在達も追い、皆が地上へと降り立った。

「ホープ、グロウ。しっかりしろ！」

ホープを抱きしめたまま倒れているグロウの元へと移動し、コレージは声をかけた。

「済まない…………… これをやると……………体がもたないんだ……………」

「僕も……………もう…………… ……駄目……………みたい。」

二人の体には傷がたくさん刻まれており、息も途切れ途切れだった。

「諦めるな！ 諦めたら、誰がマスター達を出迎えるんだ！」

「キャアッ！」

「グワアアッ！」

だがすでに意識が遠くなってしまった様で、二人はそれ以上何も言わなかった。その後後方で攻撃を受け悲鳴を上げる存在が後を絶たなかった。完全に囲まれている状態となっており、神すらも負ける相手に対して自分達が勝てるのか分からない状態だった。

本気モードで戦っても歯が立たない相手に対して、コレージはどうしようもなかった。

「ッ……やられてたまるかぁっ！」

「コレージ！」

「まだ負けていません！ 諦めないで下さい！」

「！」

自らも負けてもいいからと特攻をかまそうとしていたコレージの耳に、声が入った。空からしたその声の主は、彼の良く知る存在だった。

「ティース！ ラクト！」

「自分も戦います！ だから、あの人の元へ！」

「えっ！」

「喰らええっ！」

「なぎ払え！ 氷の刃達！」

ティースは空を飛びつつそう叫ぶと、手首に生えている羽を一気に急成長させ空中へやると、そのまま刃に変えて相手に向かって攻撃した。ティースに運ばれていたラクトも宙へと浮かんだ隙に、その場から大量の氷柱を降らせた。次々と降り注ぐ羽根に敵の大群は切り裂かれ、次々と闇に帰っていった。

「貴方もマスターの元へ行ってください。彼を影ながら支える貴方も、必要です。」

「だが……これ以上は。」

「チッ、仕方ないな…… ティザー、アレをやるぞ。」

「……分かったわ。もう粘るくらいなら、一部を根絶やしにするだけね。」

ティースとコレージの会話を聞いて、プレスルとティザーは合図をしてもう一度突破口を開く事にした。昔ながらの合図を二人がするのを見て、ラクトもその様子を見て本来の姿に戻った。

「お前等……」

「俺があん場所まで一気に運ぶ。運べて二人だ、一気に行くぞ！」

「……分かった。頼むぞティース。」

「任せてください、コレージ。」

「おいピスフリー まだ力が残ってたら起きろ、ストレンジャーを助けに行くぞ！」

「ああ！ わかってらあ！」

二人の突破口を信じて、コレージは近場で痛みに耐えていたピスフリーを回収しラクトに身を任せさせた。そんな二人を両手に抱え、ラクトはその場から猛スピードで走り出し、正面に向かって特攻していった。

「逃がすかぁ！」

その様子を見た敵集団の一部が、彼の前に立ちはだかった。だがそんな両者の間に、新たに二人が間に入った。

「こればかりはやりたくなかったが、もう手段は選ばねえ！」

「消えなさい貴方達！ 私達の元の配下となりなさい！」

プレスルとティザーは次々にそう言うと、両手を互いに組み合い、ダンスをするかのようなポーズをとった。そして、互いに目を瞑り、一気に見開いた。

「「未知の瞳………！ 『ナッシングアイズ』！」」

二人がそう叫ぶと、二人の目から眼光が飛び交い、邪魔する敵に向かって命中させた。すると、一部の敵はその場で意識を失い倒れ、一部の敵はその眼光を浴びた直後、周囲の敵を攻撃しだした。

「仲間割れ………！？」

「プレスルの目は気絶、ティザーの目は魅了させる力がある。少ない魔力で放つその一撃は、絶大だ。」

「凄い………」

ラクトに軽く説明されつつ運ばれていくコレージとピスフリーは、関心のまなざしを向けつつ移動していった。だがラクトの表情は明るくなく、この後のことを気にしている様子だった。

『そう。微量しかない全魔力を消費してまで放つ絶大な一撃だが………』

「うっ………」

「くっ………」

バタッ！

『その後は、保障出来ない身となる………皆………ゴメンネ………』

ラクトの心配が的中したのか、プレスルとティザーはその場で体制を崩し倒れてしまった。その後方に居た他の存在達も次々と力尽き、倒れてしまった。

もう犠牲はたくさん出てしまい、残っているのは自分達とストレンジャー達だけ。なんとしても勝ちたいと願いつつ、ラクトは流れる涙を振り払いつつ飛んで行った。

## 仲間割れ

---

ラクトがコレージ達を運ぶ少し前、ラプソディ達の下へとたどり着いたストレンジャー達は彼らと退治していた。移動先の彼らの居た場所は、ビリーブの効力が切れても大丈夫なような正常な場所となっており、異様な雰囲気は漂っていた。

だが清浄な場所なのだと分かったためか、ストレンジャーは一息つき、少し移動した。

「来たカ……… この身に足りない物を続べし青龍ヨ。」

ストレンジャーの姿を見て、操られているラプソディはそう言いつつ、不気味な笑みを浮かべた。同様にチェリーとテュードも似た様な笑みを浮かべており、こちらも正常ではない事が見て取れた。

「お願いだマスター もう、こんな醜い戦いは終わりにしてくれ。貴方はこんな事は望んでいないはずだ。」

「それはどうかナ…… 闇に染まりし心は、肉体をも闇に染めてしまウ。すでにラグナロクは始まッタ、もう戻る事は出来ナイ。」

なんとか戦う事だけは避けたく、ストレンジャーは説得を試みた。だがはやり話し合うだけでは和解するのは難しい相手のようで、理屈を言いつつもう戻れない事を言った。

「両者のどちらかが死なない限り、この戦いは止まらナイ！ ……さあ青龍よ、貴様の心を頂こウカ。」

「………」

強制的には頂こうとはせず、ラプソディは軽く手招きをし、ストレンジャー自身から手放すよう誘導した。話し合いが無理ならば、行動するしかない。だが相手は自分の創造主、勝ち目はない。だからと言って、言いなりになった所でこの戦いが終息するわけでもない。

彼は悩みつつ、顔を少し下げた。

「そうはさせません。」

そんなストレンジャーが悩む中、イノセントはスティックを片手に彼らの間に立った。その様子を見て、プロミスとブラベリーも続きストレンジャーとラプソディの間に入った。

「この戦いの鍵をいきなり得られると思ったら、大間違いだぜマスター」

「存在、死ぬ……… 皆、怖い………」

「彼の優しい心を、これ以上汚す前に。私達がお相手します！」

「皆………」

それぞれが戦う準備を整え、急な攻撃にも絶えられるよう対峙した。その行動を見て、ストレンジャーは絶句したただ立っている事しか出来なかった。

「フッ、面白い……… なら、丁重に迎えてヤレ。ヘル、ヨンムンガルド。」

「はい、お兄様。」

「楽しませテ……… くれよナァ！！」

彼らの行動を見て、ラプソディは軽くそう言いつつ指を前に向けると、チェリーとテュードはそう言ったのも矢先、それぞれが使用する武器を手にし、四人に襲い掛かった。先にテュードが前

へと出ると、大きな鎌を振り回し、三人をその場から上空へと吹き飛ばした。

「キャアッ！」

「チッ！ 分かれていくぞ！」

「分かった……！」

いきなり来た攻撃に戸惑いつつも、プロミスは指示を出し彼らに行動を促した。すると、ブラベリーは飛ばされたイノセントを回収し近くの地面へ。上空の身動きが取れない状態だったプロミスは、炎の翼をまとい二人とは別の方向へと向って飛んでいった。

「二頭を追うものは一頭を得ズダ。ヘル、サラマンダーの元へ行ケ。」

「分かりましたワ、お兄様。」

「ヨンムンガルドはガブリエルとガーゴイルダ。せいぜい楽しんで来イ。」

「了解！」

その様子を見てラプソディが指示を出すと、チェリーはプロミスの元へ、テュードはイノセントとブラベリーの元へと向っていった。相手の指示も早く、彼らは地面に足をつけた途端に強襲された。

「クッ！ 指示が早い！？」

「駄目…… 負け、ない！！」

「私だって……荷物にはなりません！！」

両者は互いに位置が分かれつつも、それでも対等に戦おうと攻撃を受け止め、なぎ払った。ココまで送ってくれた皆が、マスター達の帰りを待っている。ならばその想いに答えなければと、意思だけでほぼ動いてる状態だった。

負けるわけには行かない、犠牲を出さないためにも。そう想い、彼らは味方だったチェリー達と退治していた。もちろん相手から見たら仲間割れとも思っていないため、本気で挑んでいるようだった。そして、絶えず不気味な笑みを浮かべていた。

「何で……… 仲間同士で………」

「それが戦いダ、ストレンジャー」

プロミス達が応戦しだした事を見て、ストレンジャーは呟きつつ涙を流した。どちらも自分の味方のはずなのに、操られているからと行って応戦していいはずがない。なのに、何で戦っているのかが分からなかったのだ。

そんな彼の元に歩みつつ、ラプソディは言った。

「君は今まデ、犠牲を出さずに戦おうと思ってイタ。だがそんな事ハ、戦いの中ではありえない。」

「………」

「誰しもが傷ツケ、誰しもが身に傷を負ウ……… それが戦ダ。」

「だからって………！ 何で望んでも居ない相手同士で、戦ってるんだ！」

ラプソディの言う事にも一理あるのは分かっていたが、ストレンジャーは納得出来ないと叫んだ。彼が指示を出した互いの相手は、両者にとって関係のある相手だった。プロミスから見たら、チェリーは詫びなければならぬ相手でもあり家の当主。ブラベリーから見たら、テュードは互

いの痛みを分かち合う存在同士。イノセントも例外ではなかったが、共に心痛い相手なのだ。そんな相手同士を戦わせて、彼は何が楽しいのかがわからないようだった。

「君は優しすぎタ。そしてその身ニ、この体の足りない全ての思いを込めて生まれてキタ。戦うだけの力が、完璧に備わっているにも関わらず。」

「……………」

そう言いつつ、ラプソディは軽く俯いているストレンジャーのそばへと近寄り、右手の爪を伸ばした。

「そんな君ニハ、我の埋め合わせになるだけダ！！」

「！！」

そしてそのまま高く振り上げ、彼を引き裂こうとした。だが

ガキンッ！！

「！」

彼の爪は別の金属と触れたような音がした後、彼の表情は一変した。先ほどまで誰も居なかった場所に、二人の存在が立っていたからだ。

「そうはさせないぞ、偽元。」

「ガードが手薄な時に狙うなんて、いい手使ってくれんじゃねえか！」

彼の攻撃からストレンジャーを守ったのは、コレージとピスフリーだった。互いに所有する武器で彼の攻撃を全て受け止めており、ラプソディを見ていた。どんな動きをしても、全て払う体制なのだろう。殺気とはまた違った意思を見せ付けていた。

「……フッ、そう来なくてはナ。」

二人の眼差しを見て、ラプソディは不敵な笑みを浮かべ、そのまま宙へとバク転し元居た場所に降り立った。そしてしっかりと距離が取れた事を確認すると、コレージとピスフリーは武器を構え直した。

「コレージ、ピスフリー……！ どうして。」

先ほどまで自分を含めて四人しか居なかった場所に、どうして彼らが居るのかとストレンジャーは問いかけた。

「さすがに奴が、一人で対峙するストレンジャーに何かしないとは思わなくてな。ラクトに頼んで運んでもらった。」

「大丈夫だぜストレンジャー 俺が絶対に守って見せるからな。」

「……………ありがとう。」

すると、体制はそのままコレージはそう答え、ピスフリーは笑顔を見せつつストレンジャーに安心するよう言った。その言葉を聴いて、ストレンジャーは少し流れていた涙を拭った。

「ならば、さらに君が自意識で動くようしむけてヤロウ……………」

ラプソディはそう答えると、右手を宙に向け人差し指で何かを描くような仕草をした。すると、

彼の近くに液晶画面のようなホログラフィが浮かび上がり、何処かの映像を写していた。

「！！ 皆！！」

映し出されていた場所、それは先ほどまでストレンジャー達が居た仲間達の場所だった。だがそこには敵に敗れ倒れている仲間達の姿が映っており、体には傷を折っておりボロボロの状態だった。コレージを送り出してくれていたティースさえも倒れており、グロウもビリーブもアルドールも。そしてプレスル達も、皆負けていたのだ。

映像には写っていないが、この様子だとテュールも無事とはいえないのだろう。ストレンジャーがそう叫ぶと、ラプソディは予想通りと言わんばかりに笑みを浮かべ、さらに左手を挙げ右手同様に動かした。

「君を送り出してくれた存在ハ、皆我らの軍に敗レタ。残っているのは君達ト、彼らだけダ……………」

すると、両手に小さな魔方陣が浮かび上がり、プロミス達の方へと向って魔法弾が飛び出した。

「いけないっ！ 皆逃げろ！！」

「何っ！！」

ストレンジャーの声を聞き、他の敵と対峙していたプロミス達は声のした方角をみた。するとそこには、白い閃光玉に近い魔法弾が数十発打ち出されており、彼らの元に向って襲い掛かってきた。

「ぐわあっ！！」

「キャアアアッ！！」

だが急な攻撃だったため回避も難しく、彼らは受身をするのが精一杯だった。もちろん受け止めてもダメージが元々強い魔法弾だったため、それでも致命的な一撃だった。

「アーッハッハッハッハ！！」

そんな仲間達の悲鳴を聞き、ラプソディはさらに高笑いした。自らが創りだした存在を相手にしているのにも関わらず、そんな酷い仕打ちに彼は喜んでいたので。痛みつけられている仲間たちを見て、ストレンジャーは涙を浮かべ叫んだ。

「……ッ！ お願いだっ！！ もう止めてくれ！ マスター！！」

もう誰も苦しめたくない、そんな彼の優しい想いの声が、辺りに響いた。

## 終焉への契約

---

目の前で行われる行動を目にし、ストレンジャーは涙目でラブソディに言い放った。その言葉を聞き、ラブソディは行動を止めた。

「だったら、解ってるナ。どうしたらいいのカ。」

「……………」

ラブソディの言った言葉を聞き、ストレンジャーは黙った。

この争いを終わりにする方法、それはただ一つ。自分の心を、ラブソディに差し出す事。それはすなわち、心と体を切り離すと言う事であり、ストレンジャーがこの世界では動かない存在と化する事を示していた。そんな事をすれば、回りの皆は確実に涙を流し、自分は意識を失う。その対価として、ラブソディを操っていると思われる存在が体を返す。

「ストレンジャー！ 何迷ってんだ！」

ラブソディに言われ、考えていたストレンジャーの背後から声を掛けられ、右肩に手が乗った。ストレンジャーはゆっくり後ろへと振り向くと、そこにはピスフリーが立っていた。

「そんな事をして、アイツがマスターの体を返すわけ無いだろ！！ 解りきってる事をどうして迷うんだ！！」

「…………… それしか、この戦争を止める方法が、無いからだ……」

ピスフリーの問いかけに、ストレンジャーはそう答えた。そう、この争いを止めるには、元凶であるラブソディを止めるしか、方法は残されていなかったのだ。兄弟関係で共に操られているチェリーとテュード。 それに対峙するプロミス、ラクト、ブラベリー、イノセント。だが操られている側の方があからさまに力が上のため、多人数でも勝ち目は低かった。

ラブソディの放った号令により、動き出した敵軍は次々と対峙する敵をなぎ倒し、大地を紅く染めて行った。もうこの戦争を止めるにも、敵軍全滅を行うにしても仲間が少なすぎるのだ。すでにこの場にはおらず、自分達の代わりに敵を食い止めているホープ達。彼らが全員いたとしても、敵全滅は無理だ。だからこそ、ストレンジャーに残された選択肢が、一つになっていたのだ。

「ゴメン、ピスフリー もう俺には、こうするしか方法は無いんだ。解ってくれ。」

「っ！！」

ストレンジャーの言った答えを聞き、ピスフリーはストレンジャーとラブソディの間に立ち、対峙した。

「あくまでその行動をやるっていうんだったら…………… スtrenジャー、俺を切ってからにしろ！」

「ピスフリー……………」

持っていた武器を消し、ピスフリーはストレンジャーと真正面から向かい合った。これは、誰もが答えの解りきっている取引だ。

そう、ストレンジャーには仲間を切る事は出来ないのだ。他者を傷つけ、血を流させる事を。

「……………」

あからさまに困っているストレンジャーを見て、ピスフリーは顔色を少し明るくした。

「お願いだ…… 考え直してく」

ドスッ！

「え！！！」

ピスフリーが言おうとしたとたん、腹に鈍い激痛が走った。

「コレージ！」

「な…… なん…で……」

ピスフリーの腹に一発拳を打ち込んだのは、コレージだった。

「ストレンジャーを困らせるような事をするんじゃない。それが親友のすべき行動では無い事を、お前は行った。」

「貴様……」

コレージの言った事に対して、ピスフリーはそういうと、前のめりに倒れた。倒れたピスフリーを、コレージは両手で支えた。

「すまない、コレージ……」

「いいんだ。ストレンジャーが仲間を切ってまでするなんて思っていない。障害は元々敵対してた、自分がお似合いさ。」

ピスフリーをゆっくり地面に寝かせつつ、コレージは言った。

「でもいいのか、ストレンジャー 本当にする気なんだろ。」

「……ああ。もうこれしか、方法は無いからな。」

コレージからの問いかけも、ストレンジャーは同じように答えた。

「……解った。もう言わない。」

「ありがとう、コレージ。」

ストレンジャーの意思が固い事を察し、コレージはピスフリーを支えつつ、道を開けた。

「マスター 貴方の望み通り、俺の心を差し上げます。」

ラプソディのそばへと行ったストレンジャーは、決意を伝えた。

「ふッ いい心がけだナ。」

「ただし、一つだけ守って欲しい事がある。」

ストレンジャーはそう言いつつ、両手を胸へ触れ、光り輝く自らの心を取り出した。暖かい光に包まれた自分の心。 中心角には宝石に近い物体があり、それを核に光が発生していた。

「これは貴方に差し上げます。その代わりに、マスターの体を返してくれ。」

「……なるほど。面白い条件ダナ……」

ストレンジャーからの条件を聞き、ラプソディは不信な笑みを浮かべた。

「だがその条件を、我が守ると思うのか？」

当たり前の様な質問を、ラプソディは言った。

「確かにその確立は低い。でも、マスターが心を許したからこそ、貴方はそこにいる。それだけ、元の貴方は優しい方なんだと俺は思うから、契約条件を出したんだ。」

「なるほど……」

ストレンジャーからの問いかけを聞き、ラプソディは呟いた。

「……よかろう。」

「ありがとう。」

ラプソディの答えを聞き、ストレンジャーは素直に自分の心を差し出した。ストレンジャーの心はラプソディの手の中に収められ、ラプソディの胸へと徐々に収められて行った。

『ッ…… 意識が……』

自分の心が姿を消すにつれ、ストレンジャーの意識はもうろうとしだした。

バタッ！

そして完璧に姿を消すと同時に、ストレンジャーはその場に崩れ落ちた。

「ストレンジャー！」

その様子を見たコレージは、すぐさま倒れたストレンジャーを抱えた。だが体は冷え切っており、ついさっきまで動いていたとは思えないほどの変わり様だった。胸の奥から発していた鼓動は無く、完璧に亡骸と化していた。

「フハハハ！ ようやく完璧な体を満たす心が手に入ッタ！ これで、最終楽章の終焉が決められル！！ 愚かな龍メ！」

「貴様ッ！」

高笑いするラプソディの言った事に対して、コレージは目を輝かせて睨んだ。だが相手は強者の心を奪った自分の創造主。勝ち目は無く、打つ手が何も無かった。

『ストレンジャー……』

自分の腕の中で意識を失っている龍に対して、コレージは呟いた。